

## 第147回簿記検定試験 3級 出題の意図・講評

### [第1問]

#### (出題の意図)

基本的な仕訳を問う問題です。いずれも過去の試験問題に類題がありますので完答が望めます。

1. 収益および費用の記入漏れがある現金過不足の問題です。借方計上の現金過不足が雑損に結びつくこと、収益の未記入があることに惑わされず適切に処理する必要があります。
2. 各種税金の支払いに関する問題です。店の事業に関わる税金と、店主個人の税金の支払いについては区別して適切な勘定を用いる必要があります。複数の勘定科目が考えられますが、指定された勘定科目の中から選択することに注意しましょう。
3. 商品代金の一部を前受けしていた時の掛売上げの処理と、発送費の処理が組み合わさった問題です。それぞれを分けて考えれば解答を導き出せます。
4. 未収収益の再振替の問題です。前期末に計上された未収収益の処理を適切に考えられれば、その反対仕訳として解答が導き出せます。
5. 有価証券の売却に関する問題です。株式取得時の単価を適切に算定できれば、売却単価との差額から有価証券売買損益を算定することができます。

#### (講評)

1. 2. に誤答が多くありました。

1. については、費用の未記入と収益の未記入が混在していたためか、受取手数料という収益を借方に記入する間違いが多く見られました。費用のみ記入あるいは収益のみの未記入に比べると難しいということもできますが、過去にも多く出題されていますので、やはり基本問題といえるでしょう。基礎力の充実が望めます。

2. については、所得税預り金とする誤答が多く見られました。所得税預り金は本来従業員が支払うべき所得税を当店が一次的に預かっているときに用いられます。つまり給料の支払い額がその分減るわけですが、本問では反対に当店の現金を支払っているわけですから、預り金にはなりません。

このほか、4. では借方と貸方を逆にしてしまったもの、5. では指定以外の勘定を用いてしまったものなどの誤答が散見されました。いずれも1. および2. と同様基本問題といえますので、テキスト等で確認をおきましょう。

## **[第2問]**

### **(出題の意図)**

資料から商品有高帳を作成し、純売上高、売上原価および売上総利益を求める問題です。

商品有高帳には売価に関わる数値は記入しないということを理解する必要があります。つまり、商品有高帳作成時に資料にある売上時の売価を用いないこと、売価の修正である売上値引きについては商品有高帳に記載しないことの2点に注意しなければなりません。

ただし、純売上高を求める際には、売上高の集計にあたって売上値引きの金額は差し引かなければなりません。このように、商品有高帳作成の時と純売上高を求めるときでは売上に関する数値の使い方が異なる点を適切に理解しましょう。

### **(講評)**

商品有高帳の問題は、過去に何度も出題されている基本問題ですが、払出欄に売価で記入する誤答が多く見られました。基礎的な論点については十分に確認しておきましょう。

問の(2)では、純売上高の金額算定にあたって、売上値引きを差し引かない誤答が多く見られました。商品有高帳には売価の変動は記録されませんが、純売上高の算定にあたっては値引き額を差し引かなくてはなりません。この点に注意が必要です。

また、次月繰越高を売上原価に含めてしまう誤答も多く見られました。商品有高帳を締め切るに当たって、次月繰越高は払出欄に記入されますが、売れていないから次月に繰り越すわけですから、売上原価に含まれません。この点の理解を確実なものにしておきましょう。

## **[第3問]**

### **(出題の意図)**

1か月分の取引を集計して残高試算表を作成する問題です。一看すると分量は多いですが、取引は日付順ではなく項目ごとにまとめられています。そこで、例えば(1)現金に関する事項について取引をすべて借方・貸方に分けて仕訳に書き出すのではなく、現金をすべて電卓上で集計したうえで相手勘定科目のみを書き出すなど工夫をすれば、時間をかけずに解答できます。早く正確に答えるテクニックは、検定合格だけではなく簿記実務でも必要です。

個々のポイントは次のとおりです。

1. 今回は久しぶりに項目ごと取引をまとめた出題であったことを考慮し、重複取引の指示を加えました。今後の出題で指示を加えるとは限りませんので、留意してください。
2. 商品発送費（顧客負担）の勘定科目については、指示がなくても解答用紙の試算表から企業が用いている方法を判断することが必要です。
3. 中小企業の借入では元金均等返済が多くみられます。今回は知識がなくても解ける出題としましたが、今後は月々の返済も含めて学習しておくことが望まれます。

#### （講評）

今回の正答率は高くも低くもない印象です。誤答が目立ったのは、①商品発送費（顧客負担）、②給料の支払い（所得税の源泉徴収）、③普通預金の残高の3点です。

①については上記の出題の意図のとおりです。実務においても、企業によって設定している勘定科目が異なるため、本問のような判断が必要な場面があります。②と③は「控除後」の指示を読み取れていないことによる誤りが多く見受けられました。特に③は6月末残高と問題文で示されている取引の金額をそのまま集計するだけですので、問題文をしっかりと読んで落ち着いて解くことが大切です。

なお、ICカードは過去に第1問や第4問で出題されていることから、一定の受験者が正答を導けていました。本問のように交通費以外での使用、もしくは従業員の交通費に関してICカードの利用履歴を確認した後に企業から従業員へ使用額を支払う使い方もありますので、取引パターンを限定せずに学習することが必要です。

#### 【第4問】

##### （出題の意図）

本問は、支払手数料勘定と前払手数料勘定の記帳問題であり、過去にもよく出題されているタイプの問題です。実務ではいろいろな手数料を支払うことがあり、それを費用処理するのか、資産の取得原価に算入するのかを理解できているかを問いました。また、貸借対照表項目と損益計算書項目では勘定の締切方法が異なるので、それが理解できているかも問いました。

**(講評)**

各取引の仕訳は基本的なものであり、勘定記入の摘要欄も語句選択にしましたが、正答率は予想よりもやや低かったです。多かった誤答は①勘定の締切方法(損益なのか次期繰越なのか)、②仕訳で支払手数料が生じない取引を転記している、③前払手数料の金額の算定です。

転記を苦手とする受験者もいますが、仕訳と転記はワンセットですから、勘定記入の理解を深めて欲しいと思います。また、貸借対照表項目と損益計算書項目では勘定の締切方法が異なりますので、この点についても学習しておいてください。

**[第5問]**

**(出題の意図)**

本問は、精算表作成の基本的な問題であり、過去にも類似問題が何度も出題されています。未処理事項と決算整理事項の仕訳、修正欄への記入、貸借対照表または損益計算書への移記、当期純利益の計算といった一連の流れが理解できているかを問いました。

**(講評)**

精算表作成の基本的な問題であったため、良くできていました。間違いが目立った箇所は、前払保険料の算定と、勘定科目の貸借対照表または損益計算書への移記です。前者については、経過勘定項目の理解が必要です。後者については、ある勘定科目が貸借対照表または損益計算書のいずれに記載されるのかの理解が必要です。

精算表は作成できるが、財務諸表(貸借対照表と損益計算書)の作成ができない受験者が一定数いるようです。精算表と財務諸表の関係が分かれば、財務諸表の作成は難しくありませんので、財務諸表の作成についても理解を深めておいてください。